

## 【佳作】

## 私が本を読む理由

森岡麻衣（滋賀県 大津市立粟津中学校 3年生）

「なぜ本を読むのか」無類の本好きで読書が生活の一部となっているような私が、このことを真剣に考えるとは思ってもよらなかった。

この作品に出会う前の私は、受験が迫ってくる中で進む道が見えずに現実から目を背けて、本の世界に逃げこんでいた。読書中は、現実を忘れることができたからだ。私は、様々なジャンルの本を読むことで何かが変わると期待し、ひたすら読みあさっていた。心のどこかでは、このままでは根本的な解決にならないと気付いていたのかもしれない。しかし私は、本の世界に没頭し、いつしか問題を解決しようという気力もなくなっていた。

そんな時に出会ったのがこの本だった。主人公の林太郎も本の世界に閉じこもっていて、私は自分と重ねるようにして読んだ。活字の世界に没頭する林太郎に、そして私に、彼の祖父は語りかける。「本には力があるが、それはお前の力ではない。本が自分の代わりに人生を歩んでくれるわけではない。」と。そして静かに「お前はただの物知りになりたいのか？」と付け加えた。私は、体に電流が走るような衝撃を受けた。大切なことは、自分で考えて行動することであり、多くの量の本を読むことは重要ではない

と分かったからだ。

すると、ある疑問にも気付いた。「なぜ本を読むのか」ということだ。確かに読書は人生の助けになる。しかし、悩みを解決できるのは、本ではなく私自身なのだ。今までの読書に意味はあったのか、私にとって本とは何か、本を通してどうなりたいのか。そんな様々な問いが私の頭に浮かんだ。そして、考えれば考えるほど「なぜ本を読むのか」という疑問に行き着くのだ。一人では答えが見つかりそうになかった私は、とりあえず続きを読むことにした。私と同じように悩みながら過ごす林太郎も本の力は何かと考え始める。彼がその答えに気付いた時、私は印象深い場面に会うことになる。彼は本の力とは「人を思う心」を教えてくれるものだと言った。その言葉は、私の中にすっと入ってきた。さらに、「なぜ本を読むのか」という疑問にも私なりの答えを見つけることができた。それは「様々な価値観」を知るためだ。

本には、林太郎が語った通り、たくさんの人の思いが描かれている。その人たちの物語、言葉に触れ、一緒になって感じることで、身近な人や一生会うことのないような人の思いまでも知ることができる。そして、人の気持ちを知ると、多くの人の価値観に気付くことができるのだ。

また、私が一番大切だと感じたことは、その価値観の違いに理解を示し、受け入れることだ。私は、これまで多くの本を読み、様々な考え方があることを知っていた。だが、知識として知っていただけで、全くといっていいほど生かしていなかったのだ。このままではいけない、そう思った。

そんな私にある転機が訪れる。それは、体育祭のリレーでのことだった。リレーは一位を目指して走る。もちろん、私たちリレーメンバーの思いも同じだった。ただ、一位を目指す方法が違った。

私はチームの結束力を高めるため、チームワークを大切にしたいと思っていた。一方で、チーム内で積極的に勝負し、競い合おうという意見も出た。私はその意見に反対だった。なぜなら、チーム同士の勝ち負けにこだわるとうるさく思われると、チームの士気が悪くなると思っていたからだ。いつもの私なら、文句を言いながら従うか、無理やり自分を押し通していた。しかし、全員が一位になりたいという思いは一緒だということに気付いた。その方法がチームの和を大切にすれば、チーム内の競争心を大切にするかの違いだけなのだ。価値観の違いだけでチームがばらばらになるのは、もつたいないと思った。そして、今こそ本に教わった、考え方の違いを理解して歩み寄るべきだと思い、話し合いをすることにした。その結果、声を掛けて励まし合いつつも、互いに競い、高め合っていくことが全員が満足する結論を出すことができた。周囲からすれば、ごくありふれた結論かもしれないが、私にとっては互いの価値観を認め、受け入れる大切さを身を以て感じられた経験になった。私は、きっかけをくれた本に感謝した。

「なぜ本を読むのか」私が導き出した答えは「様々な価値観」を知ること、様々な人の考えを理解し、受け入れられるようになるためだ。そして、この答えは人それぞれなのだろう。だが、それぞれが答えを見つけた時、自分が生きる上で大切にしたいことに気付けるのではないか。これから先も困難にぶつかるたびに本を読むだろう。そして今度こそは、本を逃げ場所ではなく、パートナーとして、自分の頭で考え、行動し、切り抜けていきたい。また道に迷い、本に逃げることもあるかもしれない。しかし、そんな時も本は優しく背中を押してくれる。

「本を読むのはよい。けれども読み終えたら、次は歩き出す時間だ。」と。

書名…本を守ろうとする猫の話  
著者…夏川 草介